室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

「一帯一路」政策下の新清史批判

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-04-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 楊, 海英
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009834

★研究動向★

「一帯一路」政策下の新清史批判

楊海英

はじめに

一月末のある日、台湾の八旗出版社から私のところに連絡が入った。中国政府は突如、新清史批判のキャンペーンを開始したので、貴殿の本も注目され、売れるだろうという「嬉しいニュース」だった。拙著『逆転の大中国史―ユーラシアの視点から』(文藝春秋、2016年)の翻訳が完了し、春にも出版される見込みである。「逆転」とは、内陸アジア、ユーラシアからの視点を指す。新清史批判はまさにこの「内陸アジア」や「ユーラシア」、モンゴルからの歴史観をターゲットにしているので、当然、注目されるはずだ。ちなみに、出版社の名前「八旗」が端的に示しているように、社長は満洲人である。内陸アジアからの手法と観点から従来の中華中心史観を打破しようとして、立ち上げた出版社である。世界中のユニークな本、それも中国を相対化し、客観化する著作を次々と翻訳出版してきたので、大いに関心を集めている。なかでも、私が紹介した日本の杉山正明や岡田英弘らの著作、講談社の「興亡の世界史」シリーズが好評を得ており、いずれもヒット作品となっている。私は杉山や岡田からの学問的薫陶を受けているだけでなく、内陸アジアの一員でもあるので、本来の立場に戻って中国史を語っているだけで、実際のところ、さほど「逆転」していない。1990年代にソ連崩壊直後に内陸アジアで実施した科研費に基づく調査研究の成果でもある[1]。しかし、中国はまさにその「内陸アジア」に照準を当てて、国を挙げて一帯一路政策を推進している現在において、新清史批判をスタートしている。

二　新清史批判の本音

清朝は中国最後の王朝か。それとも長城以南の漢人地域、即ちチャイナ・プロパーを含め、内陸アジアの東部を包摂したユーラシア帝国として位置づけるか。このような歴史観をめぐって中国と世界の歴史学界との間に大きな溝がある。認識の差異は以前から存在していたものの、北京の御用学者たちは最近、執拗に欧米の「新清史」研究と日本の清朝史研究を攻撃している[2]。共産党が主導する壮大な歴史修正主義が跋扈しているように見える。

2019年1月14日、中国共産党の機関誌『人民日報』は学術誌『歴史研究』の論文を転載して、欧米と日本で注目されている「新清史」批判のキャンペーンを始めた。『歴史研究』の常務副編集者の周群と中国人民大学清史研究所の劉文鵬がその先頭に立って、烽火を挙

1 科研費調査の研究代表は松原正毅・国立民族学博物館教授であった。

2 日本における清朝史研究と新清史との関連については、すでに多くの議論がなされており、最近では金振雄による論評がある。金振雄「日本における〈清朝史〉研究の動向と近年の〈新清史〉論争について―加藤直人著『清代文書資料の研究』を中心に」東京外国語大学海外事情研究所 *Quadrante*, No.20, 2018.

げた。

周群の論文は単純明快だ。「私たちは清朝史研究における発言権をしっかりと握らなければならない(牢牢把握清史研究话语权)」という。彼曰く、歴史研究は「中国的特色ある社会主義を堅持し発展させ、中華民族の偉大な復興、中国夢を実現させるのに重要な役割を果たしている」という。新清史派に属す「極少数の西側の学者たちは歴史ニヒリズムの立場で清朝史を研究しているが、漢民族の地位と役割を無視している」と批判する。周群からすれば、漢民族こそが大清王朝を支えた屋台骨だという。そして、新清史研究者は清朝を内陸アジアの帝国でもあると位置づけることによって、「我が国の辺境を切り離そうとしている」とも危機感を抱いているようである。そして、最後に周群は「我々は清朝史研究の発言権をしっかりと握り、唯物主義史観と中国共産党の指導を確保しなければならない」、と主張している[3]。このように、歴史研究において、共産党の指導を貫徹することによって、「我が国の辺境」を守ろうとしているのが、本音であろう。

もう一人の劉文鵬は「内陸アジア」という概念を問題視している。彼からすれば、そもそも厄介な概念を創建したのは、オーウェン・ラティモアだという。書名こそ挙げていないが、恐らくは氏の *Inner Asia Frontier of Chin*a を指しているだろう。ラティモアは確かに Inner Asia を書名にこそ使っているものの、学術概念化し、更に体系化したのは、ハンガリーのサイナーである[4]のには気づいていないようである。劉に言わせると、「内陸アジア」や「中央アジア」、ひいては「アルタイ山」も含め、極めて複雑な文化的、政治的概念であるがゆえに、欧米の新清史学者らはことさらに清朝の非中国的側面を強調しているという。そして、そのような「偏向ぶり」は「漢民族の貢献を矮小化」しているし、いわゆる「統一された内陸アジアは存在しない」と唱える[5]。

管見の限り、新清史も杉山正明や岡田英弘も内陸アジアの文明的、文化的一体性については強調していたものの、中国人が愛して止まない政治的に「統一された」内陸アジア云々は主張していないのではないか[6]。周群も劉文鵬も政治的懸念、意図的誤読が先行し、学説の神髄が理解できていない嫌いがある。

三　内陸アジアのウイグルの民族問題

---

[3] http://www.cssn.cn/mzx/yysx201901/t20190114_4810510. 周群《牢牢把握清史研究话语权》。

[4] 実際に「内陸アジア」たる概念を歴史研究において提唱したのは、ハンガリー人の D. Sinor である。森安孝夫「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」『内陸アジア史研究』26、2011 年、3-34 頁。

[5] http://www.baidu.com/link?url=o349n2uil5T2lXMIbWATMef-l_wJc4f66E4JlK1FhxftF-69uiWVE51-GdEHRIDYMnYLol3vr2qgQzAHfZ6kY0TUI8XVYa0NSI30vgG_auqCZDUbuvoXeo95TJfM-PgE&wd=&eqid=d6cadea300087430000000065c6a2e4e。劉文鵬《正確認識"新清史"與"内陸亞洲"》。

[6] ただし、ユーラシアの遊牧民世界には緩やかな、共通した政治的理念とシステムがある事実と抵触しない。例えば、Nicola Di Cosmo, Allen J. Rank and Peter B. Golden(eds), *The Cambridge History of Inner Asia*, Cambridge University Press, 2009.

周知のように、1912 年に清朝皇帝から権力を平和裏に禅譲された漢人民族主義者たちは一つのユニークな学説を考案して、満洲人を打倒した辛亥革命の民族主的革命の性質を賛美し、漢人ナショナリズムを鼓舞した。その際、満洲人が中国を 268 年にわたって長期間支配できた歴史を解釈する際に、限りなく「漢化」、つまり「中国化」を持ち出して説明した。

こうした言説には中国人の歪んだ心理が内包されている。中国人は古代から満洲人やモンゴル人を夷狄と見なし、中華と異なる他者である。他者それも中華思想の序列では下位にランクされてきた夷狄による統治は屈辱の他何物でもなく、できればその統治の事実を抹消したいくらいだろう。しかし、300 年間近く、「野蛮人」に支配された事実は簡単に消せないので、「漢化」や「中国化」を持ち出して説明し、自己を納得させる。「野蛮人たる夷狄」は武力こそ優れているものの、最終的には文化力の強い中華に同化されたし、中国人の文化力の方が優れている、という観点だ。中国ではずっと、この種の中華への同化論、言い換えれば「中国文化優越論」が主流を成してきた。

一方、アメリカの歴史家たちは 1990 年代からまったく新しい解釈を呈示した。満洲人のシナ統治が成功したのは、彼らが最後の最後まで征服者として「国語騎射」、即ち満洲語を大清帝国の国語として定め、騎馬弓射という内陸アジア遊牧民の伝統を守り通した為だという。満洲人の最高指導者はモンゴルやトルコ系諸民族の遊牧民に対しては「ハーン」と称して公文書を配布していたし、長城以南の漢人たちに対しては「皇帝」として君臨した。「ハーン」と「皇帝」という二面性を同時に有していたからこそ、漢人の住む中原から、トルコ系民族が暮らすパミール高原の東麓(東トルキスタン＝新疆)、そしてモンゴル人の草原を凌駕した巨大な帝国を運営できたからである[7]。新清史とは称しないが、『世界史の誕生』を上梓した岡田英弘や『大モンゴルの世界』を執筆した杉山正明ら日本を代表する内陸アジア史学者たちも同様な見方を唱えてきた。

こうした帝国運営はまた満洲人の勤勉さを物語っている。彼らは決して中国文化を排除しなかった。康熙帝と乾隆帝は漢人知識人以上に漢文の素養が高かっただけでなく、モンゴル語とトルコ語にも堪能だった事実が彼らの寛容の精神性を雄弁に物語っている。

しかし、巨大化した現代中国の御用学者たちはこうした学説が気に入らない。漢人が満洲人の「下僕」だったのは否定しようもない事実だが、それ以上に「辺境地域」それも新疆とモンゴルが歴史的に中国のものではなかったとの新清史の内包する深奥の観点に強い危機感を抱いているのが本音である。共産党の政治指導は別として、唯物主義を持ち出す中国人研究者のほとんどが大清帝国の「国語」である満洲語が読めないし、読もうとする努力もしないので、満洲人が何を考えて清朝を維持してきたかについても無知のままである。

では何故、ここに至って突如政府系のメディアで新清史をやり玉にするのか。

---

[7] 欧立徳「関於“新清史”的幾個問題」劉鳳雲・董建中・劉文鵬編『清代政治与国家認同』社会科学文献出版社、2013 年、3-15 頁。

答えもまた彼らの批判文にある。中華民族の偉大な復興を政治的なスローガンにするのはいいが、ウイグルやモンゴルはその一員か否か。中華民族の一員であるならば、どうして「兄貴の漢民族」が「弟のウイグル」を100万人単位で強制収容所に閉じ込めるのか。現在だけ、ウイグル人という特定の民族のみを敵視しているのではなく、1966年からの文化大革命期にもモンゴル人を大量虐殺していた事実からすれば、漢民族の暴力性は特段顕著であると言わざるを得ない[8]。

習近平国家主席の一帯一路政策の成否は新疆ウイグル自治区にある、と言っても過言ではない。その為か、「清朝の辺境統治の政策と異民族支配の方法、それに宗教政策には成功した一面があるし、我が国の領域の礎を固めたからだ」、と周群と劉文鵬は認めている。そして、満洲人は「現地の文化と思想を尊重し、その風俗習慣を改造しない(因其教不易其俗)」を貫徹していたから、歴代の中華王朝よりも参考にすべき点が多いという。確かに大言壮語であるが、中国政府と中国人に最も欠如しているのもまた満洲人にあった、他者の文化を尊重し、同化を強制しない点ではないか。

清朝が開拓した壮大な領土を継承したいだけでなく、その国家を運営していた主体もまた漢人だった、という歴史修正主義の物語を中国社会科学院は創成している。歴史修正主義は民族問題の解決に繋がらないし、平和な国際関係の構築にも寄与しないのは自明のことである。というのも、ウイグル問題は決して「新疆の問題」だけではない。内陸アジアの問題であると認識すべきである。

四　おわりに

中国から批判された新清史であるが、当事者の一人で、ダートマス大学教授のパメラ・カイル・クロスリーは『ニューズウイーク』誌(2月19日号)は次のように反論している。

> 多くの中国研究者が、チベット、新疆、内モンゴルの文化と社会に対する習の無慈悲な戦争を非難している。それは歴史と何の関係もない。現代における人間愛と良心の問題だ。「歴史ニヒリズム」とは、過去を現在の都合に合わせて利用する立場の否定にほかならない。

要するに、中国の自称歴史学者たちが歴史ニヒリズムを武器に、「中華民族の偉大な復興」だの、「中国夢」だのを鼓吹し、ありやしない「漢民族の大清帝国への貢献」を夢想しているだけではないか。いや、漢民族の大清帝国への貢献も確か大きかったはずだ。ただし、それはまぎれもなく、「奴才＝下僕」としての貢献以上のことはなかろう。

勉強好きな中国の政治家たちも日本の歴史家の著作を愛読しているらしい。2015年4月23日、習近平の盟友王岐山が北京を訪問したフランシス・フクヤマと青木昌彦両氏に対し、

---

[8] 楊海英『墓標なき草原』上下、岩波現代文庫、2018年。

岡田英弘の研究について言及した。2013 年に台湾の八旗出版から出された岡田の名著『世界史の誕生』の漢語版を王岐山は読んでいたようである[9]。王岐山が社会科学院の歴史学者たちに新清史を批判し、「発言権をしっかり握れ」と指示したかどうかは分からない。拙著『逆転の大中国史』もまたやがては「民族分裂史」とされないことを祈っているが、寛容の精神を漢人学者に期待するのはそもそも意味がないかもしれない。

[9] 岡田英弘編『モンゴルから世界史を問い直す』藤原書店、2017 年、4 頁。